

オリンピックイメージと日本人意識，グローバル意識との関係性についての一考察

—2020 東京オリンピック，2022 冬季北京オリンピックとの比較から—

山下 玲子

1. はじめに

1.1 1964 年東京オリンピック以来のオリンピック自国開催に対する期待

2020 東京オリンピック・パラリンピック（以下東京オリパラ）は，1964 年以来の 56 年ぶりの自国開催夏季五輪として，2013 年 9 月に開催が決定してから，日本国内で注目を集めてきた。2016 年のリオオリンピックの閉会式では，次回開催地へバトンが渡されるセレモニーの最後に当時の首相だった安倍晋三氏がゲームキャラクターに扮して登場するなど，国をあげての歓迎ムードが年々高まりを見せていた（Yahoo! ニュースオリジナル THE PAGE, 2016）。実際，NHK 放送文化研究所では，その直後の 2016 年 10 月からオリンピックに期待するものを継続して調査していたが，その初回調査で東京オリパラの開催を 86% の人が評価しており，東京オリパラに関心がある人も 81% と高水準であったことを示している（鶴島・齋藤，2017）。その後，2019 年 7 月調査までの 5 回の調査の間，人々は同様の水準で東京オリパラ開催を高く評価していた（齋藤，2020）。

他方，東京オリパラ開催までは，準備段階からさまざまな不手際や不祥事が相次いだ。例えば，2012 年 11 月に採用が決定したザハ・ハディド氏の新国立競技場のデザインが建設費の高騰に対する批判を受け，2015 年 7 月に安部元首相により白紙撤回され，替わって同年 12 月に隈研吾氏の設計で建築会社も変更して着工するという事態となった。また，建設作業においても過密スケジュールにより作業員が過労自殺をするなど，その管理体制について疑問が呈された。さらに，大会エンブレムも，2015 年 7 月に佐野研次郎氏のデザインによるものが発表された後，海外のグラフィックデザイナーから自作のロゴに酷似しているとの指摘がなされ，同年 9 月にこれまた白紙撤回。2016 年 4 月に野老朝雄氏のデザインによるエンブレムが予定より 9 か月遅れて発表された。その他にも，招致を巡る贈収賄疑惑による JOC 会長の辞任，東京の酷暑に対する懸念からのマラソン開催地の札幌への変更など，お祭りムードに水を差す出来事が散発的に起こっていた。とはいえ，2019 年 5 月に行われた国内在住者向けの観戦チケットの第 1 次販売の抽選倍率が平均 20 倍を越すなど（読売新聞，

2019), 一般の人々の中での人気ぶりは堅調であるかのように見えた。

1.2 コロナ禍で一変する東京オリパラへの態度と通底するシニシズム

しかしながら, 2020年1月に新型コロナウイルスの流行が始まると, これまでの歓迎ムードは一変する。同年2月に大型クルーズ船ダイヤモンドプリンセス号での集団感染が確認され, 国内での流行拡大が懸念される中, 同年3月にアテネ聖火リレーが開始した。しかしながら, セレモニー会場に人が集まりすぎたため, 2日目を降, 準備されていた諸々のパフォーマンスが中止となった。その後, 日本に無事聖火は到着し, 東北地方で「復興の火」として展示はされたものの, 日本でのスタート開始の2日前に大会開催の1年延期が決定し, 聖火リレーも中止となった¹⁾。

その後, 2020年4月に東京に初めて緊急事態宣言が出され, 開催自体が危ぶまれる中で2021年を迎えると, 2月には, 森東京オリパラ組織委員会会長が女性蔑視発言により辞任し, 玉突き人事により橋本聖子五輪大臣が組織委員会新会長に就任, 同年3月には佐々木宏開閉会式総合統括が女性タレントの容姿を侮辱する演出案を提示したことにより辞任した。また, 同年7月には, 開会式を担当する作曲家の1人である小山田圭吾氏が過去のいじめ問題を理由に辞任, ショーディレクターを担当していたお笑い芸人の小林賢太郎氏が過去にホロコーストを揶揄するネタを披露していたことが問題視され辞任するなど, 人権や多様性に対する配慮を欠く言動から大会関係者の辞任劇が相次いだ²⁾。さらに, 大会開幕まであと11日と迫る2021年7月12日に東京に4度目の緊急事態宣言が発せられ, 東京オリパラはこの宣言下での開催となった。

このような事態に対して, 伊藤(2024)は, 1年延期が決定してから開催直前の2021年6月までの人々の東京五輪の開催に対する賛否やオリンピック全般に対するイメージ, 東京五輪に期待することなどについて, 2020年11月と2021年6月に独自に行った2回の調査によりまとめている。それによると, 2020年11月の調査では, 延期が決定した2020年3月時点では, 開催を反対する意見が40.5%, 開催を賛成する意見が40.2%と, 拮抗していたことが示されている。そして実際に調査を行った11月の時点では, 33.0%が2021年に開催希望, 44.0%が開催中止か再延期を希望していた。とはいえ, 2021年開催を希望する人と再延期を希望する人は54.3%で, 半数以上が東京開催に期待を持っていることが示されていた。さらに, 開始を賛成する理由を見ると, 純粋に日本での開催が楽しみとする人が最も多く47.2%, 次いで「これまでの準備や予算を無駄にしてほしくない」が44.8%, 「明るい話題を提供し, 元気づけてくれるから」が36.8%, 「選手の努力が報われるようにしたいから」が35.0%であった。選手の活躍が見たいという理由は, 日本選手の活躍は20.9%, 各国の一流選手の活躍は16.3%にとどまっていた。さらに, 大会のスローガンでもあった震災からの復興のシンボルを理由にする人は18.4%に過ぎず, ボランティア等でオリンピックに直接関わ

れることを期待する人はわずか1%台であった。また、開催を希望しない理由の上位3位は、新型コロナウイルスの感染に関連するもの（「世界規模の感染が来年まで続きそうだから」68.2%、「国内感染の拡大が心配だから」60.1%、「オリンピックよりコロナ対策を重視してほしいから」44.5%）であった。オリンピックの商業主義批判（27.7%）、追加経費の心配（26.0%）、政治利用に対する批判（21.4%）など、政治的、経済的な批判による理由はいずれも2割台であり、オリンピックよりも被災地・被災者支援を重視すべきとする人達も同じく2割強であった。このことから、開催中止を希望する理由として、新型コロナ対策をオリンピック開催より重視すべきと考えていた人が大多数であったことが読み取れる。

2020年11月調査では、オリンピック全般に関してイメージも質問しているが、「良いイメージ」は54.2%、「良くないイメージ」は14.2%と、全体的に良いイメージが抱かれていた。そして、その理由としては、良いイメージでは「もっとも華やかな国際的スポーツ大会だから」がもっとも多く30.8%、次いで「アスリートの素晴らしいパフォーマンスが見られるから」が23.7%、「平和の祭典だから」23.1%となっており、最高峰の国際スポーツ大会であることを評価していることが示された。他方、「国全体がまとまるから」は3.7%、「お祭りとして盛り上がるから」は2.2%など、国民が一体となって盛り上がるというイメージはほとんど持たれていないことが示されている。悪いイメージでは最大の票を集めた理由が「市民生活の向上にほとんど役立たないから」で23.5%、次いで「IOCの委員に対する接待等、高額な金銭が使われているから」で20.0%であった。さらに大会のために建設された施設の管理維持費の問題、アメリカのメディアや資本の影響力の強さ、開催地決定に賄賂等の不正がある、といったことを理由とするものがそれぞれ10%台後半であった。このように、悪いイメージは、オリンピックそのものが悪い、というより、やろうがやるまいが自分達の生活には大きく関係がない、それなのに経済的な負担を強いられたり、政治的に利用されているのは釈然としない、ということが理由であることが読み取れる。このように、伊藤（2024）の調査からは、日本の人々はオリンピックに対して国際的なスポーツ大会としては良いイメージを抱きながら、どこか他人事であるかのような、いわばシニカルな目で見ていることが示唆される³⁾。

また、伊藤（2024）の2021年6月調査では、オリンピック開催直前でありながら、オリンピック開催に反対が52.1%と賛成の21.8%を大きく上回っていた。そして反対の理由として感染拡大の懸念や政府のコロナ対策への不満といったコロナ関連の理由に加え、「政府・組織委員会の『オリンピックありき』の姿勢に納得できない」、「これまでのIOC、JOC、組織委員会の対応や発言に不信感があるから」という声が4割前後見られており、これまでの不祥事や不手際に対して推進組織への違和感が噴出してきていることが見て取れる。逆に、賛成の理由では、アスリートファースト的な意見である「これまでの選手の努力が報われるようにして欲しいから」が5割を占め最も多く、次いで「日本で開催されること自体に意義が

あるから」が38.0%, 「これまでの準備や予算を無駄にしてほしくないから」が32.0%, 「明るい話題を提供して, 元気づけてほしいから」, 「日本選手の活躍を見たいから」が28.7%, 28.1%と続いていた。ここから見ると, 開催に賛成している人達も, 諸手を挙げて賛成しているというよりも, 「ここまで来てしまったのだからやらないともったいない」, 「やってあげないとかわいそう」という, なかば諦めと同情の気持ちにより賛意を示していることが示唆される結果となった。ここにも, 人々の東京オリパラに対するシニカルなまなざしが反映されているように思われる。

1.3 問題意識と分析の視点

このように, 東京オリパラを巡っては, その開催前には放送局や新聞社などの世論調査も含めその開催自体の賛否やその理由についての調査が一定程度行われていたが, 東京オリパラを実際に観戦したことが人々のオリンピックに対するイメージにどのように影響したのか, また, それは開催国である日本へのイメージとどのように関連していたのか, といった点について分析を行った研究は, 事前の興味・関心の高さに比して少ないと思われる。また, 東京オリパラは1年延期の末の開催であったため, 冬季オリンピックが約半年後, しかも同じ東アジア圏である北京で行われることとなった。2022北京冬季オリンピック(以下, 北京冬季オリ)に対しても, 開催当時まだ新型コロナの世界的流行が完全に下火とはなっていなかったこと, また, この疾患の発生地とも目されていた中国での開催ということで, その開催の賛否や開催判断を巡るIOC会長の発言などが大いに注目を集めた(上久保, 2022)。しかしながら, それに伴う人々のオリンピックに対するイメージへの影響や, 開催国としての中国に対するイメージとの関連についての研究は, 東京オリパラ以上に日本国内では注目を集めていなかったと思われる。

以上のような問題意識のもと, 本研究では, 東京オリパラおよび北京冬季オリの開催は, オリンピックに対するイメージにどのように影響を与えたか, 東京オリパラ開催直前, 閉幕直後, そして北京冬季オリ閉幕直後に行った調査の結果をもとに検討する。また, オリンピックの観戦やその他の要因がオリンピックイメージに及ぼす影響について, それぞれの大会閉幕直後の調査結果から, 分析を行うことを試みた。

2. 調査概要および分析項目

本研究では, 筆者が所属するメディアと日本人研究会が実施した3回の調査のデータを用いて分析を行った。それぞれの調査の概要および質問項目は, 以下のとおりである。

2.1 調査対象者と手続き

(1) 2021年7月調査

日本在住の20～70代の日本人521名（男性260名，女性261名）が，2021年7月14日から15日にクラウドソーシングサービス Lancers にて調査協力に同意し，Web上で回答した。謝礼として，回答1件あたり110円を提示した。この調査を実施するにあたり，東京経済大学コミュニケーション学部・大学院コミュニケーション学研究科調査・実験等研究倫理小委員会より倫理審査を受け，承認を受けている（承認番号2021-03）。

(2) 2021年9月調査

日本在住の20～70代の日本人521名（男性260名，女性261名）が，2021年9月11日にクラウドソーシングサービス Lancers にて調査協力に同意し，Web上で回答した。謝礼として，回答1件あたり110円を提示した。この調査を実施するにあたり，東京経済大学コミュニケーション学部・大学院コミュニケーション学研究科調査・実験等研究倫理小委員会より倫理審査を受け，承認を受けている（承認番号2021-4）。

(3) 2022年2月調査

日本在住の20～70代の日本人501名（男性247名，女性254名）が，2022年2月21日にクラウドソーシングサービス Lancers にて調査協力に同意し，Web上で回答した。謝礼として，回答1件あたり110円を提示した。この調査を実施するにあたり，東京経済大学コミュニケーション学部・大学院コミュニケーション学研究科調査・実験等研究倫理小委員会より倫理審査を受け，承認を受けている（承認番号2021-05）。

2.2 調査項目

紙幅の都合で本稿の分析で使用した，各調査に共通の項目について説明する。なお，デモグラフィック項目として，性別，年齢（20歳から5歳刻み，70歳以上は一括の11段階，調査対象者には含まれないが選択肢には19歳以下が含まれており，見かけ上は12段階）を分析に使用している。

(a) オリンピックイメージ

オリンピックに対するイメージを測定するものとして，独自に尺度を作成し，「全くそう思わない」～「非常にそう思う」の5件法で回答してもらった。2021年7月調査では20項目，2021年9月調査，2022年2月調査は23項目であった。

(b) 日本人意識

日本人意識を測定するものとして, Karasawa (2002) のナショナリズム・愛国心を参考としたナショナリズム・愛国心尺度 (村田, 2007) を, 「全くそう思わない」～「非常にそう思う」の7件法で回答してもらった。

(c) グローバル意識

グローバル意識を測定するものとして, 岩田 (1998) のコスモポリタニズム尺度の第2因子 (異文化体験志向) 4項目および第3因子 (運命共同体意識) 4項目に, 「外来文化を積極的に取り入れることは日本にとってプラスになる」など外国へ門戸を開放することへの賛否を問う質問2項目, 「自分の同僚やクラスメートに外国人が増えることに不安を感じない」など身近に外国人がいることの賛否を問う2項目を加えた計13項目を「全くそう思わない」～「非常にそう思う」の5件法で回答してもらった。

(d) 社会的支配志向性

三船・横田 (2018) のSDO尺度 (Pratto et al., 1994, p. 763; Pratto et al., 2006, p. 320) の日本語訳16項目を「全く同意しない／反対する」～「完全に同意する／する」の7件法で回答してもらった。

(e) オリンピックの結果や競技予定の入手方法 (2021年7月調査を除く)

2021年9月調査では東京オリ, 2022年2月調査では北京冬季オリの競技観戦, 競技予定, 結果確認の手段として, テレビ中継, インターネット配信, ニュース等のダイジェストを利用したかを「あり」「なし」で回答してもらった。

(f) オリンピックの開催に対する賛否 (2021年7月調査を除く)

2021年9月調査では東京オリでは, 東京オリが開催されたことに対して, 興味なし・開催すべきでなかった・仕方なかった・開催して良かった, の4段階, 2022年2月調査では, 北京冬季オリが開催されたことに対して, 「開催に強く反対」～「開催に大いに賛成」と興味なし, の6段階で回答してもらった。

(g) オリンピックの開催国イメージ (2021年7月調査を除く)

2021年9月調査では, 東京オリが開催されて良かったと思うこととして「日本のすばらしさを世界に伝えることができた」, 開催されて悪かったと思うこととして「日本のイメージが悪くなった」に対して, 当てはまるか否かを回答してもらった。2022年2月調査では, 北京冬季オリが開催されて良かったと思うこととして「開催国 (中国) の良さが世界に伝わ

った」, 開催されて悪かったと思うこととして「開催国 (中国) のイメージが悪くなった」に対して, 当てはまるか否かを回答してもらった。

3. 結果と考察

3.1 各時期のオリンピックイメージ

東京オリ開会直前の2021年7月調査東京オリパラ閉会直後の2021年9月調査, そして, 北京冬季オリの閉会直後の2022年2月調査における, オリンピック・パラリンピックに対するイメージの違いについて, 検討した。オリンピック・パラリンピックのイメージは, 3回の調査に共通する20項目について, 全調査の回答を合わせた上で因子分析を行い, 「夢と希望」(12項目), 「政治・商業主義」(4項目), 「差別・対立助長」(4項目)の3因子が抽出された(表1参照)。

表1 オリンピック・パラリンピックに対するイメージの因子分析結果

	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
Factor1 夢と希望				
スポーツ競技のレベルがアップする	.776	.130	-.041	.582
子どもたちに夢を与える	.759	-.027	-.039	.605
スポーツ競技人口の増加につながる	.759	.077	-.023	.560
自国の選手が活躍することを誇りに思う	.716	.008	-.064	.538
障がい者への理解を促進する	.687	.000	.024	.464
選手同士の交流を深める	.679	.132	-.085	.463
発展途上国のスポーツ競技の発展につながる	.679	-.014	.034	.455
マイナー競技の発展につながる	.678	.122	-.007	.434
国同士の友好を深める	.675	-.057	.029	.469
国民意識を高める	.640	-.084	.120	.414
国際大会として最高峰の大会である	.635	-.115	.007	.451
平和の祭典である	.596	-.308	.064	.518
Factor2 政治・商業主義				
商業主義・金儲けに利用されている	.025	.813	-.086	.622
政治に利用される	-.009	.736	-.038	.532
一部の国の都合に左右されている	.075	.688	.063	.478
大会規模が大きすぎる	-.072	.395	.155	.239
Factor3 差別・対立助長				
レイシズム (人種差別) を助長する	-.007	-.010	.795	.631
セクシズム (性差別) を助長する	.021	-.064	.720	.492
国同士の対立を深める	-.040	.089	.536	.335
一部の国の選手が優遇されている	.053	.363	.397	.348
因子間相関		-.257	-.256	.267

表2 時期ごとのオリンピック・パラリンピックイメージの平均値と標準偏差

時期	夢と希望		政治・商業主義		対立・差別助長	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
2021年7月 (N=521)	-0.189	1.112	0.151	0.862	0.039	0.862
2021年9月 (N=520)	0.138	0.867	-0.010	0.929	-0.107	0.843
2022年2月 (N=501)	0.053	0.847	-0.147	0.910	0.070	0.830

それぞれの因子の、各時期の因子得点を従属変数、調査時期を独立変数として一元配置の分散分析を行った。「夢と希望」は、時期の主効果が見られ ($F(2, 1539) = 16.584, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .021$)、2021年7月と2021年9月の間、2021年7月と2022年2月の間で差が見られた。得点は2021年9月、2022年2月、2021年7月の順で高かった。「政治・商業主義」も時期の主効果が見られ、それぞれの調査回の間ですべて有意な差が見られた ($F(2, 1539) = 14.056, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .018$)。得点は、2021年7月、2021年9月、2022年2月の順で高かった。「差別・対立助長」でも時期の主効果が見られ、2021年7月と9月の間、2021年9月と2022年2月との間に有意な差が見られた ($F(2, 1539) = 5.833, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .008$)。得点は、2022年2月、2021年7月、2021年9月の順で高かった (表2参照)。

この結果から、オリンピックの開催直後には、オリンピック・パラリンピックのポジティブなイメージが高まり、金儲けや政治の道具として利用されているというイメージは低くなっていたことがわかる。その一方で、差別や対立を助長するというイメージは、東京オリパラの直後には非常に低くなっている一方、北京冬季オリの直後は一転して、東京オリ開催直前の時期よりもさらに高くなっていた。これは、北京冬季オリの開催地の中国で、その時期に人権問題が国際問題化していたこと⁴⁾、また、同大会においては、ジャンプ競技のスーツの規定違反による相次ぐ失格騒動が起きたり⁵⁾、ロシアから個人として出場していた選手によるドーピング問題が発覚し、その対処を巡って議論が沸き上がったこと⁶⁾ もその一因と考えられる。

3.2 オリパラ直後のイメージを決めたもの

先の節で、それぞれの時期のオリンピック・パラリンピックイメージについて概観したが、その時期の日本人が抱くオリンピック・パラリンピックイメージをどのような要因が左右していたのか、重回帰分析により検討を試みた。具体的には、年齢、性別の他、日本人意識 (因子分析の結果抽出された「ナショナリズム」, 「愛国心」, 「日の丸礼賛」の3因子)、コスモポリタニズム意識 (因子分析の結果抽出された「異文化受け入れ志向」, 「異文化体験志向」, 「文化平等主義」, 「地球運命共同体」の4因子)、社会的支配志向性、オリンピックの結果や競技予定の入手方法 (テレビ中継、インターネット配信、ニュース等のダイジェストそれぞれの利用の有無)、オリンピックの開催に対する賛否を説明変数とし、オリンピッ

ク・パラリンピックイメージの3因子を従属変数とした。

(1) 東京オリパラ閉会直後のイメージについて

まず、東京オリパラ閉会直後のイメージについて見てみる。「夢と希望」では、日本人意識の「ナショナリズム」が正の効果を持ち ($\beta = .377$)、「愛国心」が負の効果を持つ傾向が見られた ($\beta = -.085$)。コスモポリタニズム意識では、「異文化受け入れ志向」と「地球運命共同体」が正の効果を持つ傾向があった (それぞれ $\beta = .090$, $\beta = .098$)。さらに、社会的支配志向性は負の効果を持つ傾向があった ($\beta = -.060$)。デモグラフィック要因では、女性であることが正の効果、年齢は負の効果を持っていた (それぞれ $\beta = .080$, $\beta = -.104$)。オリンピック情報の入手方法は、インターネット配信とダイジェストの視聴が正の効果を持つ傾向があった (それぞれ $\beta = .089$, $\beta = .131$)。オリンピック開催に対する賛否は、正の効果を持っていた ($\beta = .181$)。

「政治・商業主義」では、日本人意識の「愛国心」が正の効果を持っていた ($\beta = .138$)。コスモポリタニズム意識では、「異文化受け入れ志向」、「地球運命共同体」が負の効果 (それぞれ $\beta = -.156$, $\beta = -.161$)、「異文化体験志向」、「文化平等主義」が正の効果を持っていた (それぞれ $\beta = .114$ (傾向), $\beta = .239$)。デモグラフィック要因では、年齢が正の効果を持っていた ($\beta = .092$)。オリンピック開催に対する賛否は負の効果を持っていた ($\beta = -.319$)。

「差別・対立助長」では、日本人意識の「愛国心」が正の効果を持っていた ($\beta = .221$)。コスモポリタニズム意識の「地球運命共同体」が正の効果を持ち ($\beta = .217$)、「文化平等主義」が負の効果を持っていた ($\beta = -.253$)。デモグラフィック要因では、女性であることが正の効果を持ち、オリンピック情報の入手方法は、インターネット配信が負の効果がある傾向を持っていた ($\beta = -.076$)。オリンピック開催に対する賛否は、負の効果を持っていた ($\beta = -.132$) (表3参照)。

(2) 北京冬季オリ閉幕直後のイメージについて

次に、北京冬季オリ閉幕直後のイメージである。「夢と希望」では、日本人意識の「ナショナリズム」が正の効果を持ち ($\beta = .322$)、「愛国心」も正の効果を持っていた ($\beta = -.078$)。コスモポリタニズム意識では、「異文化受け入れ志向」と「地球運命共同体」が正の効果を持っていた (それぞれ $\beta = .085$ (傾向), $\beta = .284$)。社会的支配志向性は効果を持っていなかった。デモグラフィック要因では、年齢が負の効果を持っていたが ($\beta = -.094$)、性別は効果を持っていなかった。オリンピック情報の入手方法は、テレビ中継とインターネット配信が正の効果を持っていた (それぞれ $\beta = .099$, $\beta = .079$)。オリンピック開催に対する賛否は、正の効果を持っていた ($\beta = .301$)。

「政治・商業主義」では、日本人意識の「ナショナリズム」と「愛国心」が負の効果を持

表3 東京オリ・パラ開幕直後のオリンピック・パラリンピックイメージについての重回帰分析 (標準回帰係数)

変数名	夢と希望	政治・商業主義	差別・対立助長
ナショナリズム	.377**	.019	.034
愛国心	-.085 ⁺	.138*	.221**
君が代礼賛	-.019	-.026	.006
異文化受け入れ志向	.090 ⁺	-.156*	-.034
異文化体験志向	.075	.114 ⁺	.042
文化平等主義	.028	.239**	-.253**
地球運命共同体	.098 ⁺	-.161*	.217**
社会的支配志向性	-.060 ⁺	-.014	.045
性別 (男性=0, 女性=1)	.080*	-.024	.125**
年齢	-.104**	.092*	.038
テレビ中継 (なし=0, あり=1)	.059	-.029	-.038
ネット配信 (なし=0, あり=1)	.089*	-.027	-.076 ⁺
ダイジェスト (なし=0, あり=1)	.131**	.021	.032
開催賛否	.181**	-.319**	-.132**
R^2	.512**	.197**	.154**

** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

っていた (それぞれ $\beta = -.169$, $\beta = -.162$)。コスモポリタニズム意識では, 「異文化受け入れ志向」が負の効果 ($\beta = -.204$), 「文化平等主義」が正の効果を持っていた ($\beta = .214$)。デモグラフィック要因では, 年齢が正の効果を持っており ($\beta = .145$), 男性であることが正の効果を持っていた ($\beta = -.126$)。オリンピック開催に対する賛否は負の効果を持っていた ($\beta = -.235$)。

「差別・対立助長」では, 日本人意識の「ナショナリズム」が負の効果を持っていた ($\beta = -.115$)。コスモポリタニズム意識の「地球運命共同体」が正の効果を持つ傾向があり ($\beta = .136$), 「異文化受け入れ志向」が負の効果を持っていた ($\beta = -.144$)。デモグラフィック要因, オリンピック情報の入手方法は, 効果を持っていなかった。オリンピック開催に対する賛否は, 負の効果を持っていた ($\beta = -.190$) (表4参照)。

(3) 東京オリパラ直後と北京オリ直後のイメージ形成の共通点と相違点

東京オリパラ直後と北京オリ直後のイメージ形成に影響する要因には多くの共通点とともに, 多少の相違点が見られた。イメージ形成に影響する要因を整理しつつ, 両者の相違点を開催地が自国か他国か, という視点からみてみたい。

まず, 「夢と希望」についてである。東京オリパラと北京冬季オリ直後の双方で, 日本人意識の「ナショナリズム」が正の効果を持っていた。これは, オリンピックという存在が, 国同士の戦いに勝利することで国威を発揚し, さらにそれにより感動を呼び起こすものであ

表4 北京冬季オリ閉幕直後のオリンピック・パラリンピックイメージについての重回帰分析(標準回帰係数)

変数名	夢と希望	政治・商業主義	差別・対立助長
ナショナリズム	.322**	-.169**	-.115*
愛国心	.078*	-.162**	-.011
君が代礼賛	.030	.023	-.010
異文化受け入れ志向	.085 ⁺	-.204**	-.144*
異文化体験志向	-.075	.029	.043
文化平等主義	.007	.214**	-.101
地球運命共同体	.284**	.016	.136 ⁺
社会的支配志向性	-.027	.043	.032
性別(男性=0,女性=1)	.032	-.126**	.008
年齢	-.094**	.145**	.008
テレビ中継(なし=0,あり=1)	.099*	-.019	.033
ネット配信(なし=0,あり=1)	.079*	.022	.002
ダイジェスト(なし=0,あり=1)	.046	-.056	-.079
開催賛否	.301**	-.235**	-.190**
R^2	.496**	.173**	.096**

** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

る、と捉えられていることを改めて示す結果であるといえよう。その一方で、「愛国心」は、東京オリパラの直後では負の効果、北京冬季オリの直後では正の効果を持っていた。この差は、何を示していると考えられるだろうか。この要因の1つとして、東京オリパラが自国開催であり、北京冬季オリは隣国ではあれ、他国開催であったことが考えられる。東京オリンピックが開催された時期は、新型コロナウイルスの流行による4回目の緊急事態宣言が東京都に出されていた。そのため、一都三県での競技は無観客で行われることになったが、それでも、世界各国から多くの選手団が入国してくることから、新型コロナの感染拡大が懸念されていたことは想像に難くない。このことから、「国を愛する」=「国を危険から守る」という気持ちが働き、手放しにオリンピック・パラリンピックの素晴らしさを礼賛できない、という心理が働いたのではないだろうか。その点、北京冬季オリは、東京オリパラの時期より新型コロナウイルスの流行は落ち着いていた時期に、他国で開催された大会であった。そのため、日本に誇りを持つ人々が、自国の選手の活躍を純粋に応援できたのではないかと考えられる。コスモポリタニズム意識では、共通して「異文化受け入れ志向」と「地球運命共同体」が正の効果を持っていた。これは、主にメディアを通じて、自国にしながら気軽に海外の人達との交流を目にすることを楽しみ、世界中の人達が出場することで大会が成立していることを意識することが、オリンピック・パラリンピックのポジティブなイメージ形成へと繋がっていることを示唆する結果といえる。いずれの大会でも、オリンピック関連情報へのメディアによる接触によりイメージが高まっていることから、このことは支持される

可能性が高いであろう。その一方で、東京オリパラでは、自国の優位性を感じる事が、オリンピック・パラリンピックが夢と希望、すなわちスポーツの振興や世界平和を促進するというイメージの向上に寄与する一方で、特定の集団が他の集団を支配することを是とする感覚はむしろマイナスの効果を与えていた。これも、東京オリパラの自国開催を巡る問題が関係している可能性がある。東京オリパラは、開催直前に、不祥事や失言などにより組織委員会の委員長や五輪担当大臣に辞任が相次ぎ、大会運営側に対する不信が大きくなっていった。大会の開催に際して、何を重視すべきか、という点においても、JOCやIOCなどの大会を取り仕切る組織や団体、さらに政治家などの意向は重視されていなかった⁷⁾。すなわち、自国開催のオリンピック・パラリンピックは誰のためのものか、と考えた場合に、権力を持つ側ではなく、国民のためであり、特定の「偉い」人々の意向に基づいて開催されるのではない、という気持ちが強く働くほどイメージが高かったのではないかと考えられる。デモグラフィック要因では、若い人達の方が共に良いイメージを抱いており、これはスポーツへの興味の高さと新型コロナウイルスに対する脅威の低さが関係していると思われる。しかしながら、東京オリパラでのみ、女性の方がイメージが高くなっている点は、さらなる検討が必要な点である。おそらく、東京オリパラがテレビで開催時期にポジティブイメージを大量に伝えていたこと、また、女性が中高年を中心にテレビを主な情報源としていたことと関係があるのではないと思われる。

次に、「政治・商業主義」である。ここでは、東京オリパラでは「愛国心」が正の効果を持つ一方、北京冬季オリパラでは「ナショナリズム」と「愛国心」が負の効果を持つという真逆の結果となった。これも、自国開催か他国開催か、オリンピック・パラリンピックは誰のためのものか、という視点が関係しているように思われる。東京オリパラでは、オリンピック・パラリンピックを政治的、商業的に利用することとは、東京オリパラの開催に関して国民のためのオリンピック・パラリンピックを権力を持つ側が私物化することを意味している。純粋に国を愛する人達にとって、それは許されない事態である、と感じるであろう。このことが、愛国心の高さとオリンピック・パラリンピックが政治・商業的に利用されているという評価の高さとの関係にあらわれたと考えられる。他方、北京冬季オリの場合、政治・商業主義に対する評価は、客観的なオリンピック・パラリンピックに対する評価や中国を中心とした第三国の営みに対する評価が主となる。そのため、ナショナリズム的思想を持たない、リベラルな人達による、オリンピック・パラリンピックそのものや中国に対する批判的な態度が、オリンピック・パラリンピックのネガティブなイメージに反映された可能性がある。さらに、コスモポリタニズム意識では、共通して「異文化受け入れ志向」が負の効果、「文化平等主義」が正の効果を持っていた。「文化平等主義」については、世界中の国が文化的に平等であるべき、という感覚が強い人にとっては、オリンピック・パラリンピックが一定の国や組織・団体に利益をもたらしているということが先鋭化して感じられるのではない

だろうか。また、「異文化受け入れ志向」については、外国に対してオープンであることは、政治的・商業的な国同士の不平等を感じにくくしている可能性が示唆される。そして、年齢が高い方がよりオリパラが政治的・商業的に利用されていると感じていたが、これは、政治や経済に対する興味・関心が、年齢が上がるにつれ高まることが影響していると考えられる。さらに、東京オリパラでのみ、男性の方がオリンピック・パラリンピックが政治的・商業的に利用されていると感じていた。これも、一般的に男性の方が政治や経済に対する興味が高いことが関係しているかもしれない。

最後に、「差別・対立助長」についてである。日本人意識では、東京オリパラ直後では「愛国心」が正の効果、北京冬季オリ直後では「ナショナリズム」が負の効果を持っていた。これについても、「政治・商業主義」と同様の考察が可能であろう。すなわち、自国開催である東京オリパラでは、国を大事に思う気持ちが、東京オリパラが人種差別や性差別的な言動を助長することに対して憂慮する気持ちを強めたと考えられる。中国での開催である北京冬季オリについては、まさにリベラルな人たちが人権意識を高めていた、と考えられるであろう。コスモポリタニズム意識では、共通して「地球運命共同体」が正の効果、「異文化受け入れ志向」が負の効果を持っていた。一国では世界の問題は解決できず、強い者が弱い者を積極的に支援すべき、と考える人達にとっては、男女を分けて競技を行い、国や地域の優劣が明確に表れるオリンピック・パラリンピック自体が、差別を助長するものと感じられる可能性が高いのであろう。逆に、外国にオープンであることは、政治・経済的な不平等だけでなく人道的な差別に対しても敏感でなくなる可能性が示唆される。なお、東京オリパラにおいてのみ、女性であること、インターネット配信の視聴が正の効果を持っていたが、この点については、女性が東京オリパラの開催時期に接触していた情報の量と質やインターネット配信で東京オリパラの情報がどのように伝えられていたかを精査するなど、さらなる検討が必要である。

3.3 開催地イメージとオリンピックイメージとの関係

それでは、オリンピックイメージに対するイメージは、各大会の開催国のイメージとどのように関連しているだろうか。ここでは、各大会の開催により「世界に日本／開催国（中国）の良さが伝わった」と考えている人とそうでない人、「日本／開催国（中国）のイメージが悪くなった」と考えている人とそうでない人とのオリンピックに対して抱くイメージを比較し、開催国のイメージの良化／悪化とオリンピックそのものに対するイメージとの関連を検討することにする。

(1) 日本イメージとオリンピックイメージ

「世界に日本の良さが伝わった」とする人とそうでない人、また、「日本のイメージが悪く

なった」とする人とそうでない人との間で、オリンピックに対するイメージが違うか、平均値の比較を行った。「夢と希望」では、「良さが伝わった」と回答した人がしていない人に比べ、有意に得点が高かった（回答なし： $m=0.084$, $SD=.868$, 回答あり： $m=0.711$, $SD=.607$, $t(62.492)=6.335$, $p<.001$)。「政治・商業主義」は、「良さが伝わった」と回答した人がしていない人に比べ、有意に得点が低い傾向があった（回答なし： $m=0.009$, $SD=.937$, 回答あり： $m=-0.210$, $SD=.816$, $t(55.605)=1.699$, $p=.095$)。「差別・対立助長」では、回答した人としていない人とで有意な差は見られなかった（回答なし： $m=-0.099$, $SD=.849$, 回答あり： $m=-0.193$, $SD=.783$, $t(54.291)=0.767$, $p=.446$)。

「日本のイメージが悪くなった」とする人とそうでない人との間の比較についても見てみる。「夢と希望」では、「イメージが悪くなった」と回答した人がしていない人に比べ、有意に得点が低かった（回答なし： $m=0.188$, $SD=.836$, 回答あり： $m=-0.382$, $SD=1.018$, $t(49.778)=3.639$, $p=.001$)。「政治・商業主義」は、「イメージが悪くなった」と回答した人がしていない人に比べ、有意に得点が高かった（回答なし： $m=-0.053$, $SD=.920$, 回答あり： $m=0.451$, $SD=.902$, $t(53.049)=3.579$, $p=.001$)。「差別・対立助長」では、「イメージが悪くなった」と回答した人がしていない人に比べ、有意に得点が高い傾向が見られた（回答なし： $m=-0.130$, $SD=.832$, 回答あり： $m=0.142$, $SD=.925$, $t(50.981)=1.905$, $p=.062$)。

(2) 中国イメージとオリンピックイメージ

次に、この「世界に中国の良さが伝わった」とする人とそうでない人、また、「中国のイメージが悪くなった」とする人とそうでない人との間で、オリンピックに対するイメージが違うか、平均値の比較を行った。まず、「世界に良さが伝わった」人とそうでない人との比較についてである。「夢と希望」では、「良さが伝わった」と回答した人がしていない人に比べ、有意に得点が高かった（回答なし： $m=0.043$, $SD=.843$, 回答あり： $m=1.220$, $SD=.551$, $t(3.114)=4.227$, $p=.022$)。「政治・商業主義」は、「良さが伝わった」と回答した人がしていない人に比べ、有意に得点が低い傾向があった（回答なし： $m=-0.139$, $SD=.901$, 回答あり： $m=-1.097$, $SD=1.556$, $t(3.016)=1.229$, $p=.306$)。「差別・対立助長」では、回答した人としていない人とで有意な差は見られなかった（回答なし： $m=0.074$, $SD=.822$, 回答あり： $m=-0.374$, $SD=1.655$, $t(3.012)=0.541$, $p=.626$)。ただし、「良さが伝わった」とする人が4人と少ないため、解釈には注意が必要である。

「中国のイメージが悪くなった」とする人とそうでない人との間の比較についても見てみる。「夢と希望」では、「イメージが悪くなった」と回答した人としていない人とで有意な差は見られなかった（回答なし： $m=0.079$, $SD=.843$, 回答あり： $m=-0.072$, $SD=.864$, $t(120.843)=1.480$, $p=.142$)。「政治・商業主義」は、「イメージが悪くなった」と回答した人がしていない人に比べ、有意に得点が高かった（回答なし： $m=-0.215$, $SD=.894$, 回答あ

り： $m=0.179$, $SD=.922$, $t(120.387)=3.625$, $p<.001$)。「差別・対立助長」では、「イメージが悪くなった」と回答した人がしていない人に比べ、有意に得点が高かった（回答なし： $m=0.009$, $SD=.814$, 回答あり： $m=0.364$, $SD=.846$, $t(119.873)=3.569$, $p=.001$)。

ここから、東京オリパラでのオリパライメージについて、オリパラで日本の良さが伝わったとする人達は、オリパラのポジティブイメージが高く、政治・商業主義については低く、イメージが悪くなった人達は、ポジティブイメージが低く、政治・商業主義について高いことがわかる。すなわち、東京オリパラにより日本のイメージが良くなった人達は、オリンピックは夢と希望を伝えてくれていたと感じ、イメージが悪くなった人達は、オリンピックを私物化されたというイメージを持っていたと考えられる。これは、伊藤（2024）の調査における東京五輪を開催して欲しい理由／欲しくない理由と重なる結果ともいえる。すなわち、開催を望む人達は、選手ファーストのスポーツの祭典として東京オリパラを期待し、それが期待通りであったことにより良さが伝わったと感じた可能性があると考えられる。他方、開催を望まなかった人達は、コロナ対策に対する不安や不備に加え、組織委員会やJOC、IOCといった推進組織に対する不信感を高めていた。すなわち、全体的に9月調査では政治・商業主義のイメージが低くなっている中、日本のイメージを悪くしたと考えた人達は、イメージ悪化の原因が推進組織の不透明さや失態にあると考えた可能性があることが、この結果から示唆される。

北京冬季オリでは、良いイメージが伝わったとする人が極端に少なかったが、良いイメージを持つ人はオリパラのポジティブイメージは高く、政治・商業主義は低いという東京オリパラと同じ傾向が見られた。そして、イメージが悪くなった人達は、ポジティブイメージではイメージが悪くない人達と差がなく、政治・商業主義と差別・対立助長ではイメージが高かった。政治・商業主義のイメージは、全体的には北京冬季オリ直後は3回の調査時期でもっとも低かったが、イメージが悪くなった人達の間でこのイメージが高かったのは、この人達が北京冬季オリ開催にあたってのIOCのバッハ会長や中国の北京五輪関係者の強硬的な発言に注目していた可能性が考えられるだろう。また、差別・対立助長のイメージが高かった理由は、全体的なイメージの低下と同様に、大会の中で起きたジャンプ混合団体における強豪国だけに対する抜き打ちスーツ検査による失格続出や、フィギュアスケートのロシアのワリエア選手のドーピング疑惑における裁定の曖昧さに加え、開催以前に問題になっていた中国の人権問題（ウイグル地区の弾圧、中国女子テニス選手の性的被害に対するもみ消し騒動など）も相まっての評価であるといえるだろう⁸⁾。

4. まとめと今後の展望

本研究では、東京オリパラおよび北京冬季オリの開催が、人々のオリンピックイメージと

どのように関連するのか、独自に行った3つの調査から明らかにすることを試みた。その結果、オリンピックの開催は、共通してスポーツを振興し、平和を促進するといったオリンピックのポジティブなイメージを高め、政治・商業的に利用されているというネガティブなイメージを低めることが示唆された。また、差別や対立を助長するというイメージは、大会により異なっており、その要因として、大会が自国開催であるか否か、また開催国の政治的な状況が関連していることが示唆された。このように、オリンピックは少なくとも開催直後には全体的にオリンピックのポジティブイメージを高める傾向があるものの、大会開催国としてのナショナルプライドや開催国の国際社会における立ち居振る舞いが、対立を緩和するか助長するかの判断に影響を及ぼしている可能性が示されたといえよう。

オリンピックイメージを左右する要因の分析からも、オリンピックの視聴はオリンピックのポジティブイメージ、ネガティブイメージの増幅の双方に寄与し、それは大会により異なる事、さらに日本人意識やグローバル意識、社会において誰が優位であるべきと考えるかも、それぞれオリンピックイメージに影響することが示唆された。特に、開催国の違いにより、ナショナリズムや愛国心がイメージに逆方向に影響する可能性、さらに異文化を自国内に受け入れることに抵抗がないことが、逆に世界における差別や対立に対して鈍感にさせている可能性について示唆されたことは、注目に値するのではないと思われる。さらに、オリンピックを誰のものとするかにより、推進組織のオリンピックの私物化に対する嫌悪感が異なることを示唆する結果も得られたことは、国民に受け入れられる形での推進組織の構成や運営をいかに実現するか考える際の一助になるのではないと思われる。

なお、本研究は、縦断的調査ではないため、オリンピックに対する個々人のイメージの変化を確認できていないわけではない。また、回答者はクラウドソーシングサービスに登録している人の中で調査に関心を寄せてくれた人に限られるため、全体的にコンピュータスキルが高く、かつオリンピックに興味・関心の高い人達による回答である可能性も否定できない。その点は、本研究の限界である。しかしながら、3回の横断的調査により、コロナ禍における自国開催というかつてない国際的スポーツイベントであった東京オリパラや1年以内に同じ東アジア圏で開催された北京冬季オリを、日本国民がどのように受け止めていたかについて、概観を示すことはできたと思われる。

今後の研究においては、自国開催ではないオリンピックの開催がどのようにオリンピックイメージに影響するのか、国イメージとの関連を考慮に入れながら検討していくことが求められるだろう。また、オリンピックの試合関連情報への接触の有無だけではなく、オリンピックに関してどのような情報に接触していたのかについても精査し、メディア接触とオリンピックイメージとの関連性について、さらに検討する必要があると思われる。そして、年齢差やジェンダー差については、日常的なメディア接触やスポーツ全般に対する関心、さらに政治的・経済的な関心の高さなども併せて検討することにより、それが生じる要因について

明らかにすることも求められるであろう。

注

- 1) 東京オリパラにまつわる事項については、NHK NEWSWEB の特設サイト内特集記事を参考にした (NHK NEWSWEB (2020). 東京オリンピック・パラリンピック招致からこれまで【経緯】 https://www3.nhk.or.jp/news/special/2020news/special/article_20200420_02.html 2020年4月20日配信 2024年7月10日最終確認)。
- 2) 東京オリパラにまつわる事項については、NHK NEWSWEB の特設サイトを参考にした (NHK NEWSWEB 東京オリンピック・パラリンピック大会までのあゆみ <https://www3.nhk.or.jp/news/special/2020news/chronology/> 2024年7月10日最終確認)。
- 3) 東京オリパラに対する日本国民の冷めた視点やシニシズムについては、吉見編 (2021), 阿部 (2020, 2023) でも指摘されている。
- 4) 中国の人権問題については、欧米諸国から批判が集まる中、北京冬季オリの報道官が、中国・新疆地区のウイグル族が人権侵害を受けているという主張は「うそ」だと述べ、政治的な論議が起きている (BBC NEWS JAPAN【北京冬季五輪】ウイグル族の人権侵害の話は「うそ」組織委の報道官 <https://www.bbc.com/japanese/60426532> 2022年2月18日配信 2024年7月10日最終確認)。
- 5) 北京冬季オリで2022年2月7日に行われたスキージャンプ混合団体で、高梨沙羅選手を含む強豪国の女子選手名が相次いでスーツの規程違反により失格となり、その検査方法に疑問の声各国からあがった (NHK NEWSWEB (2022). 北京オリンピック 高梨沙羅 まさかの失格“悪夢”はなぜ起きたのか <https://www3.nhk.or.jp/news/special/beijing2022/special/14/2022/2/9> 2022年2月9日配信 2024年7月10日最終確認)。
- 6) 北京冬季オリの大会期間中に、ROCとして出場していたフィギュアスケートのカミラ・ワリエワ選手が前年の12月の大会で受けたドーピング検査で、禁止薬物の陽性反応が出たことが判明。残る競技への参加の可否が取沙汰されたが、彼女が16歳未満の「要保護者」であることから、スポーツ仲裁裁判所から大会に継続して出場できる判断がくだされ、物議を醸すこととなった (NHK NEWSWEB (2022). ワリエワ15歳の失意のリンクとオリンピック <https://www3.nhk.or.jp/news/special/beijing2022/special/25/> 2022年2月18日配信 2024年7月10日最終確認)。
- 7) 2021年7月調査において、東京オリパラ開催決定に重視すべき事柄を質問しているが、「日本国民の意見」、「東京都民の意見」、「東京都以外の開催地の人の意見」は重視されている一方、「日本の政治家の意見・見解」、「外国の要人の意見」、「IOCの見解」、「JOCの見解」、「東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の見解」「スポンサーの立場」は重視されていなかった。
- 8) 本研究で分析した2022年2月調査が行われた日時は、ロシアとウクライナとの紛争が勃発した2022年2月23日の直前であり、北京冬季オリのイメージの回答に関して、この紛争の影響はほぼないと考えて良いだろう。

引用文献・参考文献

- 阿部潔 (2020). 東京オリンピックの社会学：危機と祝祭の 2020JAPAN コモンズ
- 阿部潔 (2023). シニカルな祭典 東京 2020 オリンピックが映す現代日本 晃洋書房
- 伊藤守編著 (2024). 東京オリンピックはどう観られたか マスメディアの報道とソーシャルメディアの声 ミネルヴァ書房
- 岩田紀 (1989). コスモポリタニズム尺度に関する経験的検討, 社会心理学研究, 4 (1), 54-63.
- 上久保誠人 (2022). 北京五輪で見えた中国の信用欠如ぶり, 「違反」「失格」続出で疑惑の祭典に DIAMOND Online <https://diamond.jp/articles/-/296947> (2022年2月22日, 2024年7月6日最終確認)
- Karasawa, M. (2002). Patriotism, nationalism, and internationalism among Japanese citizens: An etic-emic approach. *Political Psychology*, 23, 654-666.
- 三船恒裕・横田晋大 (2018). 社会的支配志向性と外国人に対する政治的・差別的態度：日本人サンプルを用いた相関研究 社会心理学研究, 34 (2), 94-101.
- 村田光二 (2007). アテネ・オリンピック報道が日本人・外国人イメージに及ぼす影響 平成16年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書
- Pratto, F., Sidanius, J., & Levin, S. (2006). Social dominance theory and the dynamics of intergroup relations: Taking stock and looking forward. *European Review of Social Psychology*, 17, 271-320.
- Pratto, F., Sidanius, J., Stallworth, L. M., & Malle, B. F. (1994). Social dominance orientation: A personality variable predicting social and political attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 741-763.
- 齋藤孝信 (2020). 2020年東京オリンピック・パラリンピックへの期待と意識～「2019年7月東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査(第5回)」の結果から～ 放送研究と調査 2020年1月号, 2-25.
- 鶴見瑞穂・齋藤孝信 (2017). 2020年東京オリンピック・パラリンピックへの期待と意識～「2016年10月東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」の結果から～ 放送研究と調査 2017年11月号, 2-29.
- Yahoo! ニュースオリジナル THE PAGE (2016). リオ五輪で最も世界に衝撃を与えたのは「安倍マリオ」だった!? <https://news.yahoo.co.jp/articles/6ab7cd95462f0044f4cafd9d18748495d605c2dd?page=1> (2016年8月23日配信, 2024年7月10日最終確認)
- 読売新聞オンライン (2019). 東京オリンピック【独自】五輪1次抽選, 平均20倍…チケット競争率 <https://www.yomiuri.co.jp/olympic/2020/20191125-OYT1T50130/> (2019年11月25日配信 2024年7月10日最終確認)
- 吉見俊哉編著 (2021). 検証 コロナと五輪 変われぬ日本の失敗連鎖 河出書房新社

謝辞

本研究は, 2023年度東京経済大学共同研究助成費(研究番号D23-01)による研究成果の一部である。ここに記して謝意を表明する。